



入って右壁面には 145.5 × 448.0cm の《まなざしのあわれ-otowa》(キャンパス | 油彩 | 2018 | 下)が展示されている。大画面に圧倒されるだけではなく、細部にまで意識が行き届いているので「大き過ぎる」と感じない。「あ、この風景好きだな」というような、目の前に普通に広がる自然現象を見ているような錯覚に見舞われる。

また吉村さんと話しながら《まなざしのあわれ》(116.7 × 116.7cm | キャンパス | 油彩 | 2017 | 上左)を視覚の左からぼんやりみていると、つい見続けてしまう。これはどういうことか。



我々は普段、生活している風景を意識せずに生きているのか。美術作品の前や特別な場所に赴かない限り、何かを特別に見るというスイッチが入らないのだろうか。昭和天皇が山口長男の作品を見て「これは壁ですか」と言った話は有名で、現代美術に興味がない方々にとって、特に抽象性の高い作品は、作品として目に入ってこない。我々もまた、例えばアイドルグループが登場する広告など、街で歩いていて目もくれない場面が多々ある。我々は何を見ているのかというのではなく、何を考えて見たことにしているのか。吉村が「何処」の風景を描いているの

吉村昌子は 1978 年大阪出身、2003 年京都精華大学大学院修了。卒業から活動を開始し、2012 年頃から個展タイトルが今回同様「まなざしのあわれ」となる。東京初個展。吉村が描いているのは風景である。抽象性の強い風景画を描いているとすれば宇野和幸、岸本吉弘、安喜万佐子の名前が真っ先に浮かぶ。吉村も三者もまた異なる風景を描く。吉村は今回画廊内に 3 点、事務所に 10 点の小品を展示した。画廊内の 3 点の空間性が絶妙で、その雰囲気写真を収める力は私にはなかった。ここでしか成立しない世界だ。

かは問題にならない。吉村が風景を見ながら何を考えているのか、それが吉村という個人を越えた一人の人間の行為が多くの他者の共感を呼び起こし感動を与えることは何故かを問うことにこそ、吉村の作品を見る意義が存在する。吉村を抽象表現主義の枠に納める必要は生じないし、現代日本の絵画の動向の一部として考えるだけでは留まらない。関東と関西の違いなどどうでもいいことだ。まずは吉村の作品から何かが見えてくればよい。そのためには、吉村の多くの展覧会が不可欠となっていく。

